

—スタッフ紹介—

役 職	スタッフ名
腎臓内科部長 兼血液浄化センター長	坂口 俊文
腎臓内科 副医長	高山 東仁
腎臓内科 医 員	矢野 卓郎
腎臓内科 医 員	田村 渉
看護師	植田 くみ子
看護師	前中 公紀
看護師	岩田 奈緒子
看護師	福井 典子
臨床工学技士	奥田 重之
臨床工学技士	金口 優生

—概要—

今年度はセンター内での「医看工」の連携および近隣の透析施設との連携が進んだ一年であった。

—実績—

透析導入件数	40件
血液透析施行回数	2,092回
LDL吸着療法	21回
腹水ろ過濃縮再静注(外科)	2件
末梢血幹細胞採取(血液内科)	4件

—今年度の成果—

導入患者への事前訪問による緩和

透析を導入する、つまり透析治療をはじめめる患者さんにとって不安はぬぐえないものである。主治医による説明はなされていても、医師には聞きづらいこともあるかと思われる。

そういった不安のできる限りの軽減とスタッフ側の初回の透析に向けて準備を目的として、透析室の看護師、臨床工学技士による導入前日病室訪問をはじめた。透析室の雰囲気やスタッフの紹介を行い、病状の確認とシャントの聴取、穿刺部位確認などを行っている。

患者さんの不安の解消に関する評価はなかなか難しいが、かなりの成果を得ている印象である。

フットチェックの促進

透析導入患者さんの原因疾患は糖尿病性腎症が最も多く、合併症として閉塞性動脈硬化症(ASO)が代表とされる。特に透析患者さんは動脈硬化のみならず、血圧の変動や過剰体液と除水を繰り返すため、末梢血管の閉塞には注意が必要である。

そういった背景もあり、本年より透析導入時に両下肢を写真に収め、以降の変化の指標としている。患者さんの情報については専用のノートPCにデータ保存、管理し、いつでもスタッフ全員が入力、閲覧できるシステムとしている。また

病棟、フットケア外来と連携し、適切な処置を施すよう心掛けている。

2016年度の診療改正では「下肢末梢動脈疾患指導管理加算」が新設され、維持透析患者さんの下肢抹消動脈の虚血について定期的に検査し、異常時には適正に治療することで診療報酬が得られるなど、その必要性が重視されており、申請できる体制を確保していく。



シャントエコーによるスクリーニング

当院は透析導入患者さんが年間50例前後存在する。また透析に必要なシャント血管造設術およびPTA(経皮的血管拡張術)を行っている。そのため退院後、他施設で外来透析を行っている患者さんにシャント不全の症状がでた場合、多くは当院に紹介される。初期診断としては聴診、触診、血管内エコーによる評価が重要となるが、すべてが医師によるものとなっていた。

シャントの異変は日頃、聴診、穿刺しているスタッフが気づくことが多く、近年、簡便で非侵襲的なシャントエコーは看護師、臨床工学技士での使用も広がっている。

当センターでも、今年度から臨床工学技士によるエコーのスクリーニングをはじめ、医師の職務軽減につながっている。全例はサポートできていないが、症例を重ね、術者がかわっても描出技術、測定血流量が安定するよう、研鑽している。



## 災害対策を見据えた近隣施設との連携

向こう30年に70%の確率で東南海地震発生するとされている。泉州地域は大阪湾内位置しており、津波の程度は比較小さいとはいえ、津波や倒壊に対する備えが必要である。特に当院は海岸沿いであり、津波による影響は避けられない。

また当院は入院患者さんのみの透析であるが、災害拠点病院のため、近隣施設の透析患者さんの受け入れは常に考慮しておかなければならない。

しかしながら近隣の透析施設との交流はほとんどなく、患者さんの診療情報提供書のやりとりだけであった。そのため、2014年より「南泉州透析施設連絡会」として、貝塚市以南の全16透析施設での情報交換など含めた連携をはじめた。目的は互いの顔の見える関係の構築と災害時の協力体制の確立である。

予備電源、貯水槽の有無などの情報を事前に共有し、また発災による各施設の被災状況をウェブツールに入力、情報提示できる訓練も行っている。「支援透析」(他施設に医療材料持参し、患者さんそして医療従事者がうかがい、透析装置を間借りする形で透析治療を行うこと)が円滑に行えるように各施設の透析装置の操作訓練や血液回路の相互性の確認を行っている。

まだまだ完全とはいえませんが、互いの顔がみえる関係の構築はほぼ確立できたと考えている。



## —来年度への抱負—

院内においては本年度よりはじめた様々な患者ケアをより一層充実していきたい。

フットケアについては管理加算申請も視野にいれ、総合的なケアを目指していく。

医一看護一工それぞれの専門分野を充実させることで、至適な患者管理、透析治療を実現しなければならない。そのために、各職種ともに、臨床知識の充実と、手技の研鑽に努めることはもちろん、臨床研究をすすめ、関連学会や各

職種の学会などで発表し、お互いを刺激しあう環境を作りたい。

これまでも、看護師、臨床工学技士に対し、医師と同様に、血液浄化関連の各種学会・研究会・講習会への参加は、腎臓内科・血液浄化センターの研究費から全面的に支援してきたが、今後はさらに、研究方法を学ぶための講習会や資料に対しても支援していく予定である。

院外活動においては、災害対策連携を目的として、連絡会ができてきているものの、現状は各施設の看護師、臨床工学技士を中心としての活動である。各施設長には一定の御理解をいただき活動しているが、支援透析の受け入れなどは最終的に施設長の判断が必要となる。施設長間の合意も含めた体制の確立が次のステップとなる。

「地域全体で透析患者を守る」ためには、医師会や自治体、保健センターと連携も必要と考えている。今後はこの方面の連携作も進めて行かなければならない。

大規模災害では泉州地域より地域へ支援透析の依頼も必要となる可能性が高い。今後、南河内地域や紀北地域など近隣地域との連携もおこなっていく予定である。

